

妖盗S79号

泡坂妻夫



妖盜S79号

泡坂妻夫

文藝春秋



妖盜S79号

昭和六十二年七月十五日 第一刷

定価 一二〇〇円

著者 泡坂妻夫

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷 凸版印刷
製本 矢嶋製本

万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

© Tsumao Awasaka 1987

Printed in Japan

ISBN 4-16-309710-4

妖盜S79号／目次

第一話 ルビィは火 7

第二話 生きていた化石 30

第三話 サファイアの空 55

第四話 庚申丸こうしんまる異聞 80

第五話 黄色いヤグルマソウ 104

第六話 メビウス美術館 131

第七話

癸みずのとどり西組一二九五三七番

156

第八話

黒鷲くろさぎの茶碗

180

第九話

南畝なんぼの幽霊

205

第十話

檜毛ひもうじ寺の観音像

230

第十一話

S79号の逮捕

258

第十二話

東郷警視の花道

283

装幀 長尾みのる

妖盜S
79
号

第一話 ルビーは火

馴れぬうちは、潮のとどろきで、目が覚めた。

松本義雄の住いは私鉄のガードと隣接した木造アパートの二階だった。従って、電車の響きや自動車の騒音の中でなら、充分安眠のとれる体質に出来ている。だが、波の音には閉口した。都会の騒音はただ鼓膜をくすぐるだけだが、波のとどろきは腹の底を揺り動かす。といつて、寝不足にはならなかった。夜寝られなかった分は、昼寝るからだ。

砂浜に建てられた丸太小舎ゴヤの中で、うつらうつらするの、何とも言えない気分だった。このときの波は、子守唄のように優しく響いた。目を覚まして一泳ぎする。泳ぎ疲れて小舎に戻り、うつらうつらする。空は澄み、空気は旨い。上役もいず、魚が新しい。こんな

生活を一月も続けたら、艶艶ツヤツヤと肥るに違いない。

松本義雄のこの夏は、実は惨憺さんたんたるものになる予定であった。梅雨つゆが晴れると同時に、松本が勤めていた小さな旅行代理店が倒産した。社長は行方不明、残ったのは紙屑かみくずの山。本給が安かったので失業保険では食えない。わずかな蓄えはすぐ底をついた。避暑などという考えは以ての外で、職業も嫁も金もなくては故郷へ帰る気にもなれなかった。

学校の先輩たちの間を走り廻ったが、皆「まあ、秋まで待てよ」と言う。偉い人間は避暑で会社にはいないのだそうだ。仕方ない、食を詰めて籠城ろうじょう、と肚を決めたところへ、一通の葉書が届いた。広田栄という、高校時代の友達だ。

これは景氣のいい話で、今、房州の海岸にいる。婚約者の別荘で夏を過ごすつもり。閑があったら、碁でも打たないかね、というのだ。

広田栄の魂胆は三つあるな、と思った。一つは美しい婚約者と華麗に約束をされた自分の将来を誰かに誇示したくなつたこと。また、優雅な毎日とはいふものの、実力者の娘らしい婚約者の一族とだけの生活では堅苦しくなつたのが二つ。最後は勿論碁で松本を負かし、婚約者の「広田さんで、意外にお強いわ」とかいふ言葉が聞きたいに違いない。広田が碁で勝てる人間は、松本以外にはいなかった。

結局、広田の誘いに応ずることは、彼の鴨になりに行くことと同じだ。鴨、結構、と松本は思った。こういう世話場である以上、鴨だらうが鴨だらうが言つてはいられない。とに角、食えるだけ食い、うんと土産を買つて帰ることだ。松本は机の引出しから色の変わった葉書を探し出し、すぐ行くと書いて、不足分の切手を貼り、普通便で出した。

広田栄の婚約者は想像していた以上に美しかった。眸がぱつきりと大きく、すらりとした鼻が可愛らしい。笑うと真っ白な歯が光り、均整のとれた肢体で、陽焼けした肌がぴかぴかしていた。

別荘も思った以上の豪華さだ。ロココ風に飾られた応接室の中で、広田のねじはすっかり緩んでいた。

「郁子さん、これ、友達の松本です。郁子さん、ほらいつか話した——ねえ郁子さん」

言葉の合いの手に郁子さんだ。

「これはお美しい……私、松本と申すふつつか者。以後御昵懇に。そしてまた、絢爛たるお住いで、結構ですな」

松本は自分でもよく判らない喋り方をした。あまり相手との差がひどいと、自然にこうした口調になるのだろう。

「会社の方は、うまくいっているかね？」

と、広田が訊いた。

松本は腹が減っているの、目が窪んでいる。広田の目にも順調でないことが判つたらしい。

「それがあなた、この不景氣で、おペしやりでげす」

「変な言葉遣いは止せよ。どうしたと言うんだ」

「判り易く言うよと、倒産しました。最後の給料も、まだ貰えませぬ」

「まあ……お氣の毒に」

郁子の表情が同情で歪んだ。松本はそれを見て、困らせてやりたい気分になった。

「だから、当分は閑な身体なのです。この家は広そうだから、夏の間だけでも厄介やっかいになるとしようかなあ……」

婚約者同士は顔を見合わせた。

別荘は海に面して建てられていた。海に面する一階がサンルームで、テラスの下はすぐ砂浜だった。浜は広く、外海で波は荒い。泳ぎには自信のある松本も、沖に出るには少し苦勞だ。松本は二階の一部屋を宛あてがわれた。快い風が入る部屋だった。松本は広田の自慢話を聞き、碁に負け、いつも腹一杯食事をした。またたくうちに、三、四日が過ぎた。

ああ言ったものの、そろそろ引き上げていい時期だった。そう思っていた日の午後、広田は耳寄りな話を持ち込んで来た。

「これから勤めの当てでもあるのかい？」

真剣な顔で訊く。

「ないこともないが、秋にでもならなくちゃ、めどが付かない」

「働く気はあるんだらう？」

「それはあるさ。もし、口でもあれば、明日にでも……」

広田はちよつと考えてから、遠慮がちに口を開いた。

「アルバイトの口が一つあるんだがね……」

松本は思わず微笑した。初めの挨拶が相当に効いたらしい。それとなく追い出す計画を考えていたものとみえる。

「——郁子さんの父親が、この海水浴場の発展に力を入れていてね。今はまだ交通の便は悪いし、波も荒いだが、来年にも産業道路が開通するんだ。ゆくゆくは沖合に防波堤を作り、ヨットハーバーも建設する。松林を切り開いて海浜植物園、水族館を建造する。そしてこの海岸は、一大シーサイドレジヤランドになるのだ……」

広田の頬はちよつと赤くなつたが、すぐ元に戻った。「とこでだ。今、とりあえずこの海水浴場には、一カ所だけ遊泳監視所がある……」

遊泳監視所とは大袈裟おかしなだ。高さはあるが丸太で作った葦簀わし張りの小舎こやだった。

「いつもあの監視所には、二人の監視員がいるのだけれど、そのうちの一人が、母親の病気を理由に、辞めたいと言いついてるんだ。なに、監視員の仕事は、一人だけでも充分なんだがね。市の条例でどうしても二人いないと工合ぐあひが悪いのだぞうだ。松本、夏の終りまで、その監視員になつてみる気はないかね？」

「泳ぎは得意だが、監視員などの資格は持っていないぜ」

「条例には監視員の資格などの規定ないんだ。条例をよく読むと、全く泳げなくともよいのだ」

「よし、気に入った。明日からでも監視員になろう」

広田はほっと息をついた。

「実は明日、郁子さんの叔母が七人来るんだ。どうしても部屋一つ足りなくてね。君の宿は〈蒼海楼〉にしておいた」

松本は広田の気配りも、案外大変なのだなと思った。その日のうち、これこれのアルバイトを一月勤めることになったと、職業安定所に電話を入れた。そうしておかないと、残りの失業保険を貰いそこねる心配があった。

広い砂浜はやや急な傾斜で海に落ち込んでいる。波打際に立つと、足がいきなり深みに入る。波は高いが波足が短いために、サーフィンには向かない。行楽客はもつと市寄りの、有名な海水浴場に行く。この浜に集まるのは、近くに別荘を持っている人達が多い。

浜には普通の日で十人内外、それでも土日曜には近

郊からの客でややごった返し、商人なども出たりして、いく分海水浴場らしくなる。その日は居眠りなどして、いるわけにはいかない。

監視小舎の屋根には不細工な風見鶏が立っていた。小舎の中にはいくつもの浮輪や、長い竿、網、ロープ、旗、薬箱などが備えられている。松本義雄はその小舎の中で、片手にメガホンを持ち、首から笛を下げ、監視員の字が入った鉢巻を締めて、双眼鏡で海辺を見ていけばよいのだった。

監視所の隣に、同じような葦葎張りの小舎があり、ジュースや萎れた果物などを売っている。松本は毎日煙草を買うので、そのおばさんと仲良しになった。山田初という名だった。丸顔で太い眉の下に、人の良さそうな目が印象的だ。大きな四角い腕時計を持っている。松本が見るとクエレスターのマークが付いているので驚いた。四時になると一秒たがわずそのスイス製のランダムがいい音で鳴る。そうすると、初は客がいともいなくても店を閉めて帰ってしまう。

「波は荒えけんど、ぐばくう奴は滅多にいねえだよ」

と、初が教えてくれた。「ぐばくう」とはこの土地の方言で、溺れるという意味だ。余程泳ぎに自信がない限り、波を見ただけで怖れをなし、海に入る氣を失

うからだろう。

だがそれは当てにはならなかった。松本が監視員になって三日目、若い学生が波に巻き込まれた。デパートにも入るような気安さで海に入ったのだ。

「一番手柄だな」

初は松本に売れ残りのパンを馳走した。

「仏さんは大嫌いだ。もうちいっとのところで、二人目の仏さんを見たか知れねえだ」

「二人目？ 今年になって？」

松本は嫌な気がした。意外に水死が多いのではないか。

「でも、先月のは自殺だったから、ぐばくったわけではねえ」

初の話によると、死んだのは二十歳の青年だった。大量の睡眠薬を飲んだ上、海に飛び込んだという。屍体は真夜中、ずっと北の海岸に打ち上げられた。満月の夜だった。

「おばさんは、それを見たのかい？」

「青年団に叩き起こされただよ。綺麗な顔をした仏さんでなあ。ありあ女事おんなごとのしくじりだべ」

自殺者が飲んだ薬の空瓶も浜に打ち上げられていた。屍体のあった場所から一キロも北に離れた、玉島神社

の前だった。初は屍体と空瓶が離れ離れの場所で発見されたことが、納得出来ぬらしかった。松本は軽い物は遠くに流されるのだと教えた。

監視所には先輩が一人いた。黒壁くろかべ竜介りゆうけいといい、雲を突くような大男だった。色の黒い上、身体中に剛毛が密生し、見ただけで暑くなる感じだ。顔中に髭を伸ばしているところを見ると、全然暑さを感じない体質なのだろう。

監視所で初めて引き合わされたとき、黒壁は身体中の筋肉を動かして、両手で鉄のダンベルを振り廻しているところだった。

世話役が帰ると、松本は早速黒壁に訊いた。

「泳ぎはお上手ですか？」

黒壁は白い歯を見せて豪快に笑い、問答無用とばかり、ダンベルを放り出して海に飛び込んだ。松本も続いて海に入る。意外にも、泳ぎの速度は松本の方が問題にならぬ程速い。

力を抜いているのかなと思うとそうではない。浜に上がった黒壁はゴリラのドラミングと同じ形で胸を叩いた。水泳で負けたので、相撲で勝負をつける気らしい。松本は仕方なく四つに組み、ちよっと足を掛けると、黒壁は地響きとともにあおのけにひっくり返った。

だが、偉いと思つたのは、黒壁は負けても絶対にいじけた態度を取らなかつたことだ。その後も松本に対してはいつも先輩風を吹かすのを忘れなかつた。

昼になると松本が蒼海樓へ弁当を取りにゆく。蒼海樓は木造二階建ての昔風な宿屋だつた。二人は二階の大きな部屋に寝起きし、週末になつて客が混んでくると、調理場の隣の薄暗い二畳の間に押し込められた。

広田栄は郁子と一緒に、毎日泳ぎに來た。そして必ず監視小舎を覗く。

「どうだね？」

「今日は無事だつたよ」

そのうち、広田の言う「どうだね？」は郁子のことを訊いているのだということが判つた。郁子は毎日水着を替えて現われた。一日のうち二度泳ぎに來るときは、午前中は紺色のワンピースなら、午後は真っ赤なビキニといった工合だ。

黒壁は水辺で戯れている二人を双眼鏡で追つては太い溜息をつく。

「うう、いいもんだなあ」

それで松本は、黒壁の審美眼も案外単純なことを知つた。

確かに、伸びやかな郁子の肢態は美しかった。ただ

し、あまりにも健全すぎて、見飽きがしてしまふ。松本には郁子よりも強く心を引かれる一人の人間がいた。

若い青年だつた。身体はやや小柄で、いつも黒のウエットスーツを着て水中眼鏡をつけている。身体が柔らかく、胸などは少女を思わせる肉付きだが、全体に細っそりした感じを与えるのは、手足がすらりとしていたためだ。眼鏡を取つたときの素顔は、目元がりりしく張り、小さく突き出た鼻の下に、赤い唇があつた。いつも胸に小さな五角形のペンダントをつけた、細い銀のネックレスが下がっていた。

松本が最初にその青年を意識したのは、雨の朝だつた。青年は遙か沖合いから泳いで來たように思われた。大きな波に乗つて、身軽に浜に立つたとき、沖からの光が濡れた身体の線を銀光に照り返した。強い雨足の中を小走りに駆け去つた姿に、松本は妖しきを感じた。その光景が頭の中に何重にも重なり、白っぽくぼけた画調として残つた。

青年は毎日どこからともなく浜辺に現われ、軽く泳ぐとすぐに見えなくなつた。

ある日、松本は青年の傍に泳ぎ寄つてみた。青年はそれに気付くと、信じられぬ速度で松本を引き離し、浜に上がつて小鬼のように見えなくなつてしまつた。

黒壁が双眼鏡で郁子を追うのと同じように、松本は青年の姿を追うようになった。

青年の無心に波を見る姿、独り何とはなく唇に笑みを漂わせる表情、濡れた髪を掻き上げるしぐさ。レンズを通すいつも薄い紗が掛けられているように見えた。視線が合ったときがあった。青年はいたずらっぽく笑い、すぐ波の中に駈け込んだ。

普段の日の浜辺は人影が少ない。松本はこの浜に来る常連の顔をすぐに覚えた。

午前中、最初に現われるのが学生らしい四人連れだった。ときどきギターを抱えてフォークソングを唄う。泳ぎは駄目のようで、朝の静かな波の日を選んで少し泳ぎ、あとは砂で城や裸婦を作ったりしている。「ああいう連中は溺れる心配はないでしょう。少し自信のある方が危ない」と、黒壁が言う。

次に外国人の夫婦。二人共、大きな赤い身体で、精力的に波に突き当る。大声で喋り笑う。もし溺れるようなことがあれば、引き上げるのは相当骨だろう。

午後になると、決まって浜に来るのが、奇妙な初老の二人連れの男だった。泳ぐのが目的ではない。浜辺の散歩という形で、いつも同じ半袖のオープンシャツ

に灰色のズボン。二人はあまり喋ることがない。

一人は頭が削がれたように尖り、目が細く鋭い。よほど神経質らしく、双眼鏡の中ではいつもこめかみがびくびく動いている。

もう一人はごく目立たない半白髪の男で、丸い顔の中に人の好きそうな目鼻が並んでいる。

二人は波打際には近付かない。遠くから海を見渡し、ときには砂の上に腰を下ろすこともあるが、普通はゆるゆると通り過ぎるだけだ。一見、何でもなし散策に見えるが、松本が観察すると、二人の目はゆったりした歩みとは裏腹に、鷹の目に似た動きを続けている。

あとは五、六歳の子供を連れた老人。黒壁はこの二人が砂浜に坐っているところを見て、妙なことに気が付いた。

「あの二人ね、いつもああして坐っている場所が、きちんと決まっているよ。毎日気にしているんだが、おそらく十センチと狂っていない。場所を決めるのはおじいさんか子供か知れないが、実に面白い」

その他、車で乗りつける兄弟、夫婦、子供を含めて十一人の一族。これは来たり来なかつたり。あとの顔ぶれは、時によって変わった。

そして、あの女性が常連に加わるようになったのは、

どんより曇った、月曜日の午後であった。

朝から海の色は空と同じ灰色だった。気のせいか波の音も重い。

浜ではいつもの常連が思い思いに寝そべったり坐ったりしている。海には誰も入っていない。大家族の子供たちも静かで、浜辺は活気がなかった。

何度も読み返した新聞を片手に、松本が伸びをしようにとしたとたん、薄墨色の風景の中に、緋の花が二輪鮮やかに咲き揃ったのを見た。それは、真つ赤な蝶をあしらったパラソルだった。パラソルをさした二人は、オレンジ色と黄白色のビーチウエアを着ていた。サンダルをはいた素足の色は、抜けるほど白かった。

松本はあわてて双眼鏡を取り上げ、二人の女性にピントを合わせた。

一人は目が大きく鼻が高い。やや高慢な感じはするが、都会の華やかさを感じさせる美人だ。年は二十一、二。手にサングラスを持ち、連れの女性に話し掛けている。

連れの女性はずっと若い。丸くあどけない顔立ちで、口が大きい。重そうに提げていた柳のバスケットを砂

浜に置き、中から白い敷物を引き出して砂の上に拡げた。

松本は居眠りをしている黒壁を突いて起こした。

「うん、いいですなあ。郁子さんにはない現代的なところ、僕の好みだ」

双眼鏡を見ている黒壁の目が、爛爛と光りだした。

「目が覚めたでしょう」

「夢の場面が変わったみたいだ」

「今まで、どんな夢を見ていたのだろう。」

「……や。ビーチウエアを脱ぎ始めた」

松本も自分の双眼鏡を目に当てた。

「……下に水着を着ている」

「そりゃ、そうでしょう」

ビーチウエアと同じ色の、オレンジ色の大胆なビキニが、真つ白な肌によく似合った。同じ色の帽子に黒い髪を包み込んで、すらりと立ち上がった。

波打際に二、三步歩きかけてふり返る。連れの女性が何か言ったらしい。小首を傾げ、両手を合わせる。浜にいる人たちの視線を意識しているような動作だった。女性は相手に、きらりと光る物を手渡した。

「指輪だ……大きな真珠らしい」

と、黒壁が言った。